

教育者として「平和の文化」を育む青年を取材しました。

「平和って、人を思いやることから始まると思うんです」

そう語るのは、栃木県大田原市内で小学校の教員を務める加納照久さん。加納さんの一家では、祖父・十三三三さん（故人）や祖母・寿美子さんの戦争体験が、孫の照久さんまで三代にわたって語り継がれてきた。

「特に祖父は、一家団らんで戦争のドラマを見た時など、『実際はもっと悲惨だ。戦争はきれいごとじゃないぞ』と、実体験を通して語ってくれました」

幼い加納さんは、祖父の膝の上で話を聞き、日常的に平和が語られる輪の中で育った。ゆえに、「戦争も平和も、どこか遠くにある

人の「痛み」を想像する



加納照久さんと祖母の寿美子さん

のではなく、人がつくり出すもの、と思うようになりました」。

大学に進学した加納さんは、卒業論文のテーマを寿美子さんの戦争体験にした。「祖母の経験を残さなければと思ったのです」
寿美子さんは14歳から学徒動員され、「風船爆弾」の工場で働いた。

風船爆弾とは、和紙で造った気球に爆弾をつるし、敵地まで飛ばして投下する秘密兵器だった。寿美子さんはそれが兵器だとは知らされず、国の役に立つものだと思い、毎日9時から

方の和紙を糊で貼り合わせる作業に徹した。検査は厳

しく、何度も怒られたが、重労働にも耐えた。1945年8月15日、敗戦を告げる玉音放送を聞いた――。
純粋な少女たちを兵器造りに駆り立て、かががえのない青春を奪った戦争。当時を振り返って寿美子さんは語った。「勉強しなくてはできなかったことが、一番悔しかったの」

その言葉を聞いて加納さんは思った。「今は自由で恵まれた時代になった。自分の生き方を選べるからこそ、何のために生きるかが大事だ」
教員になった今、その思

いを子どもたちに伝えようと、世界各地の紛争や自然災害、国内の出来事など、さまざまなニュースを題材に語り合っている。その時、こう呼び掛けている。「そこにいる人たちの日常がどうなってしまうか、想像してほしい」

先日は高齢者の起こす交通事故について考えた。「被害に遭った人の気持ちになって『みんなのおじいちゃん、おばあちゃんも運転するよね。今車がなくなったら生活はどうなる?』一つの出来事を自分のことに置き換える。人の痛みを想像し、当事者意識を持つ。そうすれば、物事の見方は深まっていくと加納さんは考える。「たとえ経験していなくても、真剣に思いを寄せれば自分の血肉になる。そうした生き方が平和をつくると思うんです」